



# 競艇のあゆみ

(1991～2000年)

## 第3章 競技運営編

# 競技運営編

## 主な出来事等

- スタート練習の廃止(平成3年3月)
- ランナバウト競走の活性化について答申(平成3年10月)
- 「待機行動に関する要領」を制定(平成4年3月)
- ヤマト300型モーター(トランジスタ方式)が登場(平成4年10月)
- 救命胴衣の改善(平成6年4月)
- 前検受付終了時刻が10時から12時へ(平成6年11月)
- 選手級別にA1、A2級を新設(平成7年1月)
- 阪神大震災に対する措置(平成7年1月)
- 全レース進入固定競走の実施(平成7年11月)
- ヘルメットがフルフェイス形で選手個人所有に(平成9年7月)
- GI競走「競艇名人戦競走」を新設(平成11年5月)
- 救助艇の内・外回りの明確化(平成11年11月)
- 沢田菊司選手殉職 緊急に人身事故防止について検討(平成11年11月)

競艇が誕生した頃の競技運営は、騒擾事件の誘発を防ぐ、内部体制の強化に重点が注がれていた。昭和50年代頃になると騒擾事件もほとんどなくなり、レースはスピードアップ化し、競走は熾烈化してきた。また、レースが多様化し、早朝外向前売発売、電話投票、場間場外発売が実施され、発売形態も多様化するに連れて“わかりやすい競技運営”に重点がおかれ、スタート練習、展示航走の一括方式、進入固定競走の導入、各種情報の公開など様々な改善が行われた。

昭和61年には業界初の場外発売場が誕生し、平成に入ると場外発売をはじめ電話投票、場間場外発売といった広域発売に拍車がかかり、日本レジャーチャンネルの設立も手伝って“いつでも、どこでも、おもしろい競走”が現実のものとなった。これまでどちらかというと各競艇場独自の競技運営色があったものが、全国统一の方向へと進んでいった。

また、レースそのものは“デカペラ”、“モンキーターン”等の流行もあり、いよいよ熾烈化が進み、救命胴衣、ボートの改善、フルフェイス形ヘルメットの誕生など、より安全性を追求した器材の導入等も進んでいった。

# 1991年(平成3年)

## 平成2年度救助救急対策講習会を開催

平成2年度救助救急対策講習会が、平成3年1月16日から常滑、1月23日から住之江、1月28日から芦屋でそれぞれ2日間開催された。

より熾烈化するレースの中で、より迅速かつ適切な救助活動を行うことを目的に、昭和59年10月に丸亀と下関競走場で「救助救急要員講習会」が開かれたが、昭和61年からは「救助救急対策講習会」と命名し平成元年まで続いた。この講習会は、平成2年度の事業計画に開催予定はなかった。しかし、6月から12月にかけて選手生命を危うくする重傷事故が多発したことから、競走会に重傷事故のビデオテープを送付し、選手指導の徹底を図るとともに、選手には文書を送付し、自覚を促し、救助救急要員の実技の向上を図り、業務の重要性を認識してもらおうと開催された。

講習会では、講師の講話、実技指導の他、初めての試みとして各チームに分かれ、救助救急審査会を実施し、救助救急の仕方、チームワーク、操船技術、無線応答などについて審査が行われた。

## 平成2年度のスタート事故率、史上初の0.283を達成

平成2年度のスタート事故率は、目標値0.35を大きく下回る0.283を達成した。

昭和53年度からスタート事故率の目標値を0.35以内に定め、関係者はその達成に向け日々努力を重ねていったが、なかなか達成することはできなかった。最も達成に近かったのが昭和58年と平成元年の0.35であったが、0.35を大きく割ることはなかった。この事故率の低下は、昭和59年から実施されていた事故件数に対し一律30日間のあっせん辞退を、競技運営研究委員会の答申に基づき、選手会の規程である「競走の出場辞退に関する規程」を一部改正(平成2年5月1日からF事故1件につき30日に乗じた期間に改正)したことも、その要因のひとつと思われる。

ちなみに、この事故率の目標値は、昭和42年度0.8以内、43年度0.7以内、44～46年度0.6以内、47～50年度0.5以内、51、52年度0.4以内、53～平成2年度0.35以内、2～5年度0.25以内、6年度～現在が0.3以内となっている。

## スタート練習を廃止

これまでスタート練習と本レースの進入コースの相違による苦情が、お客様から絶えなかった。また業界内では、わかりやすい競技運営を展開している最中であった。そのような中、平成2年度の地区別実務担当者会議のなかで、住之江競艇場からスタート練習の意義が薄れつつあり、スタート練習の廃止を含めた見直しをしてはどうかとの提案がなされた。これに対し、連合会は条件の整ったところから廃止しても良いとの判断を下した。

宮島競艇場はスタート練習廃止を検討、平成3年3月から前半の連勝複式のレースのみスタート練習を廃止し、4月18日のレースから全レースで廃止した。その後、各競艇場も次ページの表のように廃止し、平成3年12月、全国の競艇場からスタート練習は姿を消した。

また、これと同時期、これまでの優勝戦の周回数4周であったが、周回誤認の防止と周回が増えてレースが緊迫するというものでもなく、逆に着差がつく傾向もあることから、3周に改められた。